
風のとおり道 ～終焉（さよなら）までの軌跡～

クローバー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風のとおり道 〈終焉^{さよなら}までの軌跡〉

【Nコード】

N2102N

【作者名】

クローバー

【あらすじ】

蘭の告白を断った新一。その所為で気まずい関係になってしまった。それは新一には哀しい過去、出来事があったからである。

青子は新一への思いに気付き、快斗の変化に新一は光を消し去ってしまう

そして、衝撃の事故が起こってしまった。

それから、何日も過ぎた夏の夜、新一は異変を感じ始める。

それに気付いた蘭は徐々に取り乱していつて……。

花火大会・・・それが二人が未だむぎやきに笑っていた頃の最後
の

行事だった。

時は過ぎ——冬。

——全てを失くした新一が紡ぐ言葉は悲しくて悲しくてとても優

しい

「また・・・春が、来るね」

蘭に渡された新一からの贈り物。それは・・・

二度目の春、桜が舞い散る中・・・永遠を誓い合った二人。

絆と愛。四人の夢く、切ない、ちょっぴりほろ苦な感動ストーリー！。

綺麗な薄桃が咲き誇る

永遠の光の中を君と歩いていく。

それは終わりの無い、光の季節

序小節

・・・・森の奥で生まれた風が

原っぱに一人立つ榆の木

フワリかすめ やって来た

あれは風の通り道・・・

――風のとおり道――

――何を捨てても、君だけは守りたかった。

暗闇に浮かび上がる薄桃の灯火は桜花

藍色の天に浮かぶのは金の月

雪のように舞い堕ちる花弁は春の夜の幻影

その中に佇む貴方は、涙が出るほど綺麗だった

――桜舞う

光の季節 儚い夢

乾いた喉

濁った景色 悲しみの思い出

紅葉 もみじ

真っ赤な気持ち 涼しい寒さ

小雪

白い吐息 凍る心――

そして終焉

春の夜には夢が咲く

風の波間にたゆとう薄桃は桜

天を覆うは花霞

静寂の中、音もなく散り行く桜は芳ばしい香りと

限りなき優しさで貴方を包み込む

全ての終焉を告げる音色が光の中で穏やかに響く時……

君との楽しい宴は一思い出は一終わり。

一筋の涙 透き通る薄桃色の花びら

貴方との最後、笑い会える最後

だから・・・だから・・・笑顔でさよなら

とびっきりの笑顔で

貴方の瞳に映りたい

貴方の最後になる私は綺麗なままで・・・

ありがとう。忘れないよ

強く願うことは貴方が幸せで在りますように。

—
—
—願わくば二人の未来に希望のひかりを—
—
—

序小節 (後書き)

予章です!!

意味が解らないと思いますが

話を読むとだんだん分かってきますよ

第二小節 蘭視点

いってしまふ・・・

早くしないと・・・

――風のとおり道――

蘭視点

「ごめんな」

確かに、告白してからそう告げられた
その時の私の頭の中は真っ白

どうして？

何がいけない？

私の何処がだめ？

教えてよ。新一の為なら、何でもするから
お願い

私を置いていかないで。

もし、もしそれでもダメなら

又、昔みたい一緒にいようよ

そんな私の思いを踏みにじる様に、新一は言った。

「どうしてもやらなきゃいけない事があるんだ・・・
本当にごめんな蘭。すぐ帰ってくっからよ」

苦い顔に、悲しみの瞳をして・・・。
私は思わず怒鳴ってしまった

「新一なんか大っ嫌い！！！！
二度と私に近づかないで！！！」

ハッと気が付くと

新一はどこか寂しそうに「さよなら」と、呟いて反対の道へ歩き出した

それを私はただ、眺めているだけ。
足が重い 歩けない

この気持ちには？
行かないで・・・

第二小節 蘭視点（後書き）

久しぶりの新連載です！！

続くかどうか・・・

よろしくお願いします

第二小節 新一視点(前書き)

さっきの新一視点です。

オレ、本当はお前と居たかった

大人になっていく蘭を見て居たかった

あんな事さえなければ・・

ハッ 俺って最悪だよな

・・

自分の事なのに、あいつの所為みたいにして。

畜生・・・・・!!!!

・・

頭の中があの日に戻ってく・・

・・ドンッ・・

ガッシャーン

――パリンツ――

パラパラ・

――ヒュー・

ドカンツツ

・・・――!!ツ・・・――!!っ

早いなもうこんなとこまで

歩いてきたんだ

蘭、幸せになれよ!!

俺は蘭の幸せを一番に願ってるから・

第二小節 新一視点(後書き)

二話目に入りましたっ!!

まだ、二話目・・・泣

応援よろしくお願いします。

(T
dT
)

第三小節 新一と青子

ある人と会うのは久しぶり

――風のとおり道――

歩き続けて30分――

「腹も減ったし、あそこにでもよろうかな」

俺は喫茶店へと足に向けた

・・・ガランガラン

「いらっしゃいませー」

店内を見渡すと、一席いい所があった。

そこは一番端っこの窓辺

そこに座ると、さっそくメニューを見た。

「すみませーん

珈琲とドーナッツください」

「かしこまりました」

ふう・・・

ため息をつく。

あの言葉が蘇る

「二度と私に近づかないで！」

哀しさと悔しさが混じった顔であいつはこういった。

どうすればいいんだ・・・。

そんな時、

ガランガラン と扉が開く音とともに、
懐かしい声が入ってきた。

「新一君???」

「えっ？青子ちゃん」

そう。蘭の友達の中森青子ちゃんだ。

「どうしてここに？？」

意外そうな顔をして、彼女は尋ねてきた

「小腹がすいて・・・」

適当に答えて俺も尋ねた

「青子ちゃんは？」

「私も新一君と一緒に」

そう言って彼女は俺の前に座った。

「そうなんだー快斗は？」

「マジックの練習するからそんな暇無いつて」

「はははっ あいつらしいな」

少し気分が軽くなり
会話に華が咲いた

そこで、今、一番触れてほしくないところに、
彼女は触ってしまった。

「新一君何かあったの??」

「!! また・・・なんで」

「顔にでてるよ。蘭ちゃんとかかあったんでしょ」

直球だ。

「まあな。青子ちゃんは何かあった?」

ごまかす為に質問を返す。

「うん・・・ちよつとね」

ただ言った言葉一つで

相手の顔を曇らせてしまった。

「アツごめん」

「気にしないで」

そしてまた彼女は笑った。

俺には、その笑顔が怖くも見えた。

いいタイミングで、注文した珈琲とドーナッツがきた。

「青子ちゃん、ドーナッツあげるよ」

「えっえ！いいよ・・・そんな」

「いいっていいって。えんりよはいらない」

「ありがと・・・もらうね」

パクッ

「美味しい！！！！！！」

さっきよりも更に明るくなった。

「そうか」

「~~~~~」

本当に美味しそうに食べている。

彼女のその明るさを、俺にも分けてほしいよ。

・・・変な予感がするのは気のせいかな？

第三小節 新一と青子 (後書き)

三話きました!!!!!!

新一と青子の恋???

ち・が・い・ま・す

これでも新蘭です!!

応援よろしくお願いします。

次回のあとがきは、

タイトルの..理由..です。

第四小節 新一の告白

私が力になる

ーーーー風のとおり道ーーーー

ドーナッツを食べ終わった彼女は
こんな事を言い出した。

「新一君、お願い！辛いことを話して」

「・・・え・・・」

なんだ？

「私は新一君の力になりたい
ただのおせっかいかもしれないけど・・・」

「・・・どうし・・・て・・・そんな事」

目の前にいる、少女はなにを言っている？

「ごめんなさい!!」

実は・・・新一君と蘭ちゃんの
会話・・・私聞いていたの!!」

「・・・・・・・・そっか」

「本当に!! ごめんなさい!!」

「でも、なんで・・・それで俺を
助けようとするんだ?」

「数ヶ月前にね、蘭ちゃんから
電話があつて、そこらへんの公園で、
喋っていたの」

少し涙声になる彼女。

「そしたらね・・・蘭ちゃんが、

『新一、早く帰ってこないかな。

沢山話したいことがあるんだ。

・・・あとね、青子ちゃん

私、決めたの・・・。

新一に告白する・・・。』

って言っていたんだ・・・・・・・・」

瞳^めには、涙が溢れていた。

「だから・・・。だから・・・。

あの時、あの二人を見て、
とっても胸が痛くて。

新一君を励まして、元気にして、
蘭ちゃんと仲直りしてほしかったの・・・」

「・・・ありがと。青子ちゃん」

俺にはその言葉しか言えなかった。

そして・・・しばらくの間 沈黙が続き・・・。

おれは、ようやくうなずいた。

これから先を、彼女に託す。

「いいよ・・・解った。青子ちゃんの力を
貸してほしい」

「全てを、話す」

青子

私は新一君の告白を聞いて可哀想で

「・・・じゃあ俺、会計済ませて帰るね・・・」

「ちよっ待って！」

30

「・・・バイバイ」

そういつて消えていった。

あの挨拶のときの笑顔。

儚い瞳でわらっていた。

少し曇らせて・・・。。。

私が・・・守らなきゃ。

第四小節 新一の告白（後書き）

ちよっぴり次回予告

「新一の告白を思い出し

青子はある考えをする」

新一が途中まで言った言葉はまだはつきりしません。

（タイトルの理由）

私の大好きなトトロのBGMです。

ただ、そのBGMが好きなだけじゃなく、ちゃんと話にも繋がります

第五小節 蘇る言葉 青子の恋？

貴方にないてほしくない

――風のとおり道――

力になりたいけど・・・どんな事を
すればいいのかなあ

自分で言ったのにね

笑っちゃう

考えた

確かー新一君は

・・・俺の寿命は後一年しかないんだ・・・。

毒薬・・・の事もあって・・・

ああ、・・・毒薬って言うのはな
話せば長くなるから、簡単にするけど・・・

・・・遊園地の帰りに ある奴等を追っていたら
バットで後頭部を殴られて・・・

・・・そのまま毒薬^{それ}を飲まされたんだ。
その所為で俺は体が縮んでしまっただけ・・・

俺本来は・・・

しばらく姿を現さなかった・・・

て言っただけだ。

「後一年・・・毒薬」

まるで呪文を唱えるかのように
単語を口ずさむ

その後も何か言ってたよね

あんなこと、思い出したくないよ!!

新一君 新一君・・・

そう考えているうちに

青子は気づいた・・・

「えっ・・・なんで私、こんなに必死になっ
ているんだろう。もしかして!!」

あることが解った

そんなはずない そんなはずない

そんなはず・・・無い

・・・私が新一君を好きだななんて・・・

もし、好きだとしても・・・なんでだろう

快斗に似ているから？それとも

見た目？才能？わからない

ただ好き・・・？

違う 違う 違う 違う 違う 違う

違う 違う 違う 違う 違う 違う

絶対に・・・

絶対に？保障がある？無い。

ただ好きって・・・

二人の邪魔するみたいだよ

この際 奪っちゃえばいい

そうだよね

「そうよ、私は最悪よ」

攻めて 私が壊れるまで攻めてよッ

一人で叫んだ

「もっと・・・もっと攻めて!!」

そのくらい貴方しんいちくんが大好きだから・・・

“ 去り行く命に正しき道を・
・
・
・
”

第五小節 蘇る言葉 青子の恋? (後書き)

やっとの第五話!!

青子しか出てません ごめんなさい
しかも青子、新一に恋しちゃったこと
自覚してしまいました

快青ファンの皆様
すみません

急展開の三角関係

新一と蘭の恋はどうなる?!

第六小節 悲しい過去 叫び

正しき道あれば迷いの扉

その先何を望むのか……

――風のとおり道――

蘭……蘭……

新一はひたすら蘭の名前を言う

こんなにもお前が好きだ

会いたい あいたい

駄目だ……

別れを先に告げたのは俺なのに

俺があいたっていったりしたら駄目なんだ。

……

そんな思う、新一の頭の中は又あの日にかえっていった

パリンッ・・

・・パラッパラ・・・

ーーーービュッツ
ピカー

ドカンッーーーーー

グアッ・・・

ハアハア

なんであんな事になったんだろう

なんで　なんで　なんで　何でなんだよ!!

自分の所為だとわかっているのに

誰かの罪にしたがる俺は最低だ

最低	最低	最低	最低	最低	最低	最低	最低
最低	最低	最低	最低	最低	最低	最低	最低

さいてい　さいてい　サイテイ　サイテイ　サイテイ・・・

新一は自分を責めまくった
そして、叫んだ

「らああああああん

らああああああん」

まるで、見当らない母を捜すように

迷子になった子供のように

ただ　ただ

ずっと　ずっと

叫び続けていたのだった

第六小節 悲しい過去 叫び（後書き）

やっといつた第六話

今度は新一だけ・・・ごめんなさい。

イメージ崩れてすみません

蘭はもう 一、二話したらでてきます

見守ってください

不安ばかりで・・・。

第七小節 パンドラの呪い 最も会いたくない恋人

“自分の罪は自分で補う

だから俺は闇を選ぶ”

――風のとおり道――

さすがに喉がいたい・・。

それもそのはず、一時間も叫び続けていたのだから

「あ・・・・・・・・・・」

こっ、声が出ねー!!

ヤバイと思った新一は
のど飴を買うべくコンビニに向かった・・・

・・・

あの人と会うのも知らずに――

なぜ、耳鼻咽喉科に行かなかったのか
謎である

(声が出なかったから???)

あったあった

この　　のど飴人気なんだか・・・
後一個

新一が手を伸ばした時

パツ・・・

誰かに取られてしまった

「君もこれが目当て？」

え?!

この声、まさか・・・振り返ると

予想的中

あの・・・

黒羽快斗 通称 怪盗KID

が、居たのだ

第七小節 パンドラの呪い 最も会いたくない恋人（後書き）

出てきました！！K I Dさん（笑）

最も会いたくない恋人・・・

次回は

「快斗と新一の会話

快斗の決断

新一の中に残る残酷な思い出」
になるのかな？

快斗（K I D）ファンは、見ないほうがいいです

第八小節 パンドラの呪い 喧嘩（前書き）

快斗ファン注意！！

第八小節 パンドラの呪い 喧嘩

俺は俺を許さない

俺も許せない

ーーーー風のとおり道ーーーー

「なっ何でお前がいるんだよ!!」

声を無理に出した新一の喉はひどい状態になる前だった

「別にいたって良いだろ」

お前の都合なんか知るか

「ツツ何でこんな所にいるかだ!!」

「気分晴らしに……」

いいだろ

「ここにか？」

こんな奴が？

「そうとも」

「のど飴の、目的は」

「何にも」

「だったら俺にくれよ……」

喉がいてえんだ」

早く・・

「じゃあ褒めるよ

よくここまで声が出せたね」

「ばかにすんじゃねえ!!!!!!!!!!」

ハア ハア

怒鳴った新一・・

「なんだ？痴話ゲンカか？」

「二人、のど飴持ってるぞ」

「のど飴の取り合い？？」

ザワザワッ

周囲が反応した

快斗は笑顔で

「のど飴譲るから、他の場所いこう」

と新一に言ったのだが

その笑顔

裏の顔の笑顔だった。

「あそこから、とうざけた理由
本当は喧嘩で騒ぎになったから
だけじゃ、無いんだろ」

どうしたってそうだ

しみりとした空気が漂う中
二人の会話が続く

「ああそうとも」

ここがいいから

快斗は冷めた様な冷たい表情で答える

「理由は??」

新一も新一で無表情だ

「俺は決めたんだ」

「話が繋がってない」

つなげろよ!!

「自分の罪は自分で償うと」

「それが、どうしたっていうんだ」

「だから俺は闇を選ぶ」

「なんだと!」

それまで無表情だった新一の顔が崩れる
でも、それはただの与信にすぎなかった・・・

「聞ってる?」

恐る恐る聞く新一

「光をなくすってこと」

冷たく笑う快斗

そんな快斗に、新一は思う

光は・・・もう、彼から無くなっている

と

そして、青子ちゃんがいったのってこのことだったのか・・・

前に会った時のことを思い出す新一

そんな新一は

「マジックはしているのか」

と訪ねた

《マジック・・・そう唯一快斗を楽しませていたこと、
怪盗のときに見せびらかしていたもの》

「ああ・・・マジックは楽しい

だけど人には見せたりしない」

俺だけのもの

光を消した ただの罪人
闇をえらんで 狂った者

そして快斗は軽く、冷たく笑うと

新一を怯えさせる、新一をどん底に陥れる

・
・
・

あの日のことを 語り始めた

第八小節 パンドラの呪い 喧嘩（後書き）

9月10日は、（工藤の日）です。

新一ファンの私にはうれしい日なんですよ

この日に投稿できて感激×2

えらい短い文ですけど

私なりに奥が深い話にする予定です

あの日のことを引きずって・・・・。

長い連載、大体10話以上が目標です

よろしくお願いします

第九小節 パンドラの呪い 後悔

どうして

なんだろう

――風のとおり道――

なんだろう

このモヤモヤ・・・

蘭は自分の部屋で疑問の理由^{わけ}を
考えている

新一はどうしたのかな？・・・

さっきから新一の事、考えてばかりっ

他のこと考えよう

ッといっても無理か。

そんな蘭はふと 思った

新一に、会いたい

えっ なんだろうこんな感じ

昔と違う 何かが変わってる

何？



なんなんだろう・・・と考えている蘭、
の携帯に
着信音が響いた

「誰からだろう・・・」

開いてみるとメールが一件

青子ちゃん?!

そう、あの青子からであった

「ええと・・・この間出来た喫茶店に来てください
話したいことがあります・・・」

話したいことってなんだろう

あっそうだ!

私、青子ちゃんに聞いてみよう

蘭はそう言って喫茶店へと向かった

真実^{じじつ}を告げられるとも知らずに

第九小節 パンドラの呪い 後悔 (後書き)

おっ・・・遅れてしまった最新

第十小節 パンドラの呪い 好きな人

貴方はどう思う？

私のこと……

——風のとおり道——

はあはあ

「青子ちゃん!!」

「蘭ちゃん……」

やっときたね

結構まったんだけど・

「言いたい事って何？」
新一のこと？

「それは……」
えっとお

「いえない？」

まさか

「まあ、座ってね」

「解った」

スチャッ

そう言い、蘭がいすに座ると
青子が語り始めた

「実はね新一君・・・が打ち明けてくれたの」

「新一が？何を？」

蘭がきよとん・・・というよりマジ？みたいな顔でたずねた

「蘭・・・ちゃんを、振った・・・理由」

「えっ・・・」

すると青子はいきなり泣き出した

「どっ・・・どうしたの！！」

「新・・・君、しん・・・いちく・・・ん・・・

後・・・一年・・・し・・・か・・・

・・・生き・・・ら・・・れない

それに・・・新一・・・君は・・・コナン・・・君

なんだって・・・」

「！！！！！！！！！！」

蘭の顔が一気に真っ青となった

「だか・・・ら、だから・・・」

新一・・・クン

・・・蘭ちゃん・・・を

悲しませない・・・ように

・・・傷つくと分かって・・・いながらも

他の相手と・・・付き合うこと・・・を

すすめ・・・たんだ・・・よ

自分を犠牲に・・・して・・・

そうして、コナン・・・君・・・

に・・・なってしまつて・・・も、

蘭ちゃん・・・を

見守つて・・・いたの」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

数分後

蘭が硬く結んでいた唇を開いた

「他に・・・何か、言わなかった？」

青子は泣きながら
俯いてる

「新一・・・の・・・こと」

「い・・・ま・・・は

どう・・・しても・・・いえない」

「なんで？」

「蘭・・・ちゃんが・・・気味悪がって・・・

・・・新一・君に近づかなくなる・・・もん」

第十小節 パンドラの呪い 好きな人（後書き）

二回に分かれますよ

言葉がほとんどだ・（一丁一；）

「そういえばさあ

お前があんな姿になったのって

ちょうど冬の始まった寒い時期だったな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

新一の様子が変わりすっかり何も言わなくなってしまった
そして、怯え始めた

「ちっさな体から元に戻って組織をつぶす時
俺が探していた物、

パンドラを何故かもっていたのがお前。

クライマックス・ボスと戦った後

喜んでいたが、死んだはずのジンが

パンドラとお前を狙って狙撃した、だろ？」

|||||

「そんな・・・コナン君が新一だなんて

何で・・・なんで言ってくれなかったの？」

「解らないの・・・」

「嘘と思っても・・・本当なのが現実よね・・・。

でも・・・それとこれって」

「まだ続きがある・・・の」

|| || || || || || || || || || ||

「狙撃されてお前はビルから落下

パンドラは碎けてお前に付いた、

その瞬間 パンドラの破片が爆発して

お前を飲み込んだ。

一同みんなお前が死んだと思って

下へ・・・お前は不思議と見つからず

そのまま終わり

だけど俺はお前を必死で探した

俺の所為だ・・・俺の所為だ・・・と考えながら」

「う・・・つすら・・・聞こ・・・え・・・た

声・・・はお前が・・・叫んでたのか」

震えながら出す新一の声はかすかにしか聞こえない

それを快斗は聞き逃さなかった

「ああ・・・そうとも

名探偵ー！！ッ名探偵ー！！ッ

って必死になってね

でも、そこで見つけたんだ」

|| || || || || || || || || || ||

「哀れな新一くんの変わり果てた姿を」

第十一小節 パンドラの呪い 二人の過去（後書き）

二人組みとも乗せて組み立てた話でした
新一たちの過去が明らかに・・・！！

第十二小節 パンドラの呪い 醜い姿

ドンナニオモツテモ

ドンナニタイセツデモ

ドンナニアイシテイテモ

ムクワレナインダ・・・

ーーーー風のとおり道ーーーー

「はぁ・・・しぬぐらい臭かったな」

快斗が深いため息を着いた

「覚えていない・・・」

「そうだろ、お前気絶してたんだから」

「・・・どうだった・・・？」

新一が何故か聞いた

「気味が悪くてさ・・・

吐き気がしたよ・・・。

なんせ」

人間^{ひと}

の姿じゃないから

濁った緑の皮膚をして

手足が大きく

するどい尻尾

「顔は変わってなかったな
色以外は」

「・・・そうか」

「その後からは・・・薄っすらと」

「自分のこと・・・」

「・・・いや」

第十二小節 パンドラの呪い 醜い姿（後書き）

ごめんなさいいいいいいいいい。

短くなってしまった・・・・・・・・・・・・・・・・！！

第十三小節 パンドラの呪い ゴミ

こうなったのは誰の所為？

悪いのは誰？

――風のとおり道――

「・・・で？」

「何がだよ」

「あの子は知っているのか」

「！！！」

「忘れたか？ハハハ」

「蘭に・・・何か在ったのか」

「お前バカだな。俺が聞きてえのはその子は

お前腐った姿を知ってんのかってことだよ」

「解らない・・・」

「そうだよな。お前が言うわけ無いもんな

・・・

じゃあ俺言う。この事・・・

きつとあの子はお前に近寄らなくなるんだ

ああ面白い」

「やめろおおおおおおお！！！」

やめて、やめて！！

とっさに新一はそう叫んだ

耳が張り裂けそうなほどに

「うっせいな」

「やめろお」

「・・・ゴミはゴミらしくどっか居ろよ」

「・・・!」

「!!..ゴミはゴミらしくしてろっ!!..て」

第十三小節 パンドラの呪い ゴミ（後書き）

久しぶりの最新でした

第十四小節 パンドラの呪い 孤独

解ってるよ

そんな事

解っているよ

――風のとおり道――

「俺はゴミじゃ無い!!!」

「じゃあなんだ？」

怪物か？ああそうか、

お前化け物だったな」

「……だから

だから何なんだよ」

「解ってないな」

「解ってる」

「じゃあ、あの子の事は？

お前みたいな奴を

ずっと待ってたんだろ」

「……蘭は

蘭は関係ない」

「関係あんだよ」

「どんな関係だよ」

「さあな」

「……」

さっきと変わらない空気で
二人の会話は進んでいる

そして快斗が新一に低い声でそつと話した

「お前はただの汚物だよ、

工藤新一という名のゴミだ」

「ッ・・・・・・・・」

快斗は攻めまくった

「お前に権利はない

お前が俺に逆らうことなんてできない。

あの子を振って泣かせたお前なんて

汚物の何にでもないんだ。

役立たず、人でなし

クズ、死ね

お前みたいな奴が一番

嫌いなんだよ

お前みたいな馬鹿が。

きつとあの子お前嫌いになったよ

待っててくれなんて言って置いて

結局ほったかされる運命、

だからお前は必要ない

使命がない。

そう、お前は生きてはいけないんだ」

新一の瞳が光を失った
体も身震えている
口を開いた新一は
語り始めた

「ソウダネ、俺ナンカ必要ナイネ
誰モ俺ナンカイナクテイイト
思ウヨネ
ソレニ、蘭ハ俺ノコト
本当ニ嫌イニナツタカモ
俺自分ノコトバカリ。
誰カヲ、大切ニシテモ
愛シテイテモ
俺ハ何モ役ニタツテナインダ。
ソウダ。コノサイ自分ヲ消ソウ
カナシイ、カナシイ。
感情モケソウ
コンナ想イヲシナクテ
イイヨウニ」

感情がこもらない、いやこもって無い
声で・・・。

第十四小節 パンドラの呪い 孤独（後書き）

うわぁ・・・

やばいこの展開

じぶんで書いたのに

第十五小節 パンドラの呪い 諦め

そんなこと

どうでもなんか無くない

俺には何もないけど・・・

――風のとおり道――

「やっと、その気になったな」

快斗は勝ち誇ったように鼻で笑った

新一は聞いているのか解らなかった

「ソウシヨウ。

イマスグニ

ソウシヨウ」

「そう、俺も死ぬ

何も無い俺だからこそ・・・

お前だからこそ死ぬ」

そうだね・・・と新一も心から思った

思ったのだけれど・・・認めたくなかった

それは新一にしか解らない深さと欲だった

その中で新一の心の中に蘭の言葉が蘇った

「ただ生きてるだけじゃ駄目

楽しまなきゃ

たった一度きりの人生だもの。

自分は誰よりも何かを愛せたら

それはきっと勇気と自信になるよ」

その言葉はいつの時だったか
程遠い記憶の一つだった

・・・ラン・・・

徐々に新一の瞳に光が戻っていった

快斗はその変化に気づかないまま

手を伸ばした

「この世で最も現実^{リアル}

な死をしようじゃないか」

伸ばされた快斗の手を

新一は力いっぱい引っ張った

「ツツイツテエな

何すんだよ」

そして胸倉をつかんで

快斗の顔を自分の顔の前に合わせた

叫んだ

「俺はお前の言うとおりただの汚物だ！！

だけど・・・だけど、俺は愛せた！

・・・人を・・・誰かを・・・愛せた。！！！！

お前みたいに人を愛せなかったことなんて

無いんだよ！！！！！！！！！！」

瞬間に闇に包まれた光が離れた

第十五小節 パンドラの呪い 諦め（後書き）

T r i c k o r T r e a t ♪

どうでしたか・？・

第十六小節 深い闇から抜け出した光

あいつは・・・

俺の何なんだ・・・

それすら忘れてしまった・・・

――風のとおり道――

「・・・・・・・・・・」

「聞いてんのかよ！！！！！！」

「なんでだよ・・・」

「・・・え・・・」

「なんでなんだよお・・・！！」

快斗はまるで何かを伝えたいように泣き叫んだのだ

感情を沢山に詰め込んだようだった

「お前は どうして・・・

・・・どうして そんな・・・

できるんだよ！！

生きる意味があふれるんだよ・・・」

その涙は快斗が初めて・・・いや、久しぶりに
流した涙だ

「俺には・・・蘭がいた

愛する人がいた

だから、一時希望を失くした

としても蘭のおかげで

生きる意味があった。

できた。」

「そんなことで・・・できんのかよ!!」

「できるんだよ!!」

諦めないでがんばれば!!」

「俺には出来ない・・・」

「どうして・・・

お前は悲しくないのか？」

「悲しいよ・・・そんな風に考える俺も」

「じゃあ、ただ泣けば良い

笑いたくないのなら

泣けば良い、叫べば良い」

新一にしてはかなり冷めた言い方だった

「そうか・・・」

寂しそうな快斗の表情が新一は痛々しく見えた

「・・・お前は？」

愛する人は居ないの？・・・」

「いた・・・」

「じゃあその人を愛せば・・・いいんじゃないのか」

「簡単に言うなよ！！！」

「それが出来ないのか・・・？」

光は無い？俺の光はある

蘭という名の光が・・・」

第十六小節 深い闇から抜け出した光（後書き）

はい。御免なさい

話進んで無いみたいです。

明日も投稿します

第十七小節　今は昔と・・・

自分で自分の事がわからない

お前はそれを持ち越えたんだ

ーーーー風のとおり道ーーーー

「俺にも居たんだよ!!」

・・・青子が・・・」

「・・・青子ちゃん・・・か」

「でも・・・今は違う

好きとか違う

恋愛感情じゃない

昔と・・・違う」

「そうか・・・」

残念そうに俯いた

「青子は・・・俺のただの幼馴染だ」

「そっか・・・」

「お前たちみたいには

なれない、これから

近くにならないし遠くにもならない。

そう俺はそんなこと（一筋に思う）

なんて出来なかったんだ」

「うん・・・」

何かを感じ取ったように頷いた

「だから、それを乗り越えられた

お前が羨ましかったんだ・・・ただ・・・。

なぜ愛せなかったかは解らない

自分の事がわからない」

「・・・俺は・・・」

「・・・ごめんな」

初めて快斗に新一は謝った

「お前の気も知らないで好き勝手
言ってる」

しばらくして

何かを再生するように
固まっていた快斗が

「俺こそごめん

立派な人間^{ひと}

をこんなに傷つけて・・・」

もう何を言っても良いかも知解らないような
顔をして静かに言った

この時二人の仲は確実に寄りをもどしたようだ

“ 救われ者ただ死期みとわず
救った者幸を来

すべて何かの物語

これが何かの名もなきストーリー”

悲しい月光に透き通る空

第十八小節 それでも何かを求めてる

澄んだ瞳で見つめた青空

太陽の匂い

陽だまりの中で転げ回った記憶

――風のとおり道――

「それでも俺は・・・

蘭に好かれたい。

傷つけた証拠」

「お前・・・」

「青子ちゃんが好きなのは多分

おま・・・黒羽だと思う」

「違う・・・」

「そうだって!!」

思い切って言ってみろよ

好きって・・・」

「俺も、青子に嫌われたんだ

なんせ、お前ホント最悪って

見たいな事言ってしまったし」

「どうしてそんなこと・・・」

まあ俺に言う資格ないけど」

「まあ、色々在ったんだろうな
自分でも覚えてない」

「がんばれ!! って
変か・・・」

「がんばるよ」

「そうだ」

最初とはまるで別人のような二人・
華やかさを持っていたのだったが
次の事からしんみりした空気になってしまう・・・

「でもお前後・・・一年だけだろ？」

「・・・ああ、だけど自分のことだから
自分しか攻めないことにするんだ」

「そんなこと・・・。
来年の春・・・まで・・・なんだ・・・」

「うん」

この桜がもっと満開の中で俺は去りたい・・・

それが無理でも、無理だとしても
そうしたいんだ

眼がそう言っていた

そいつはただ立っているだけだった
まるでロボット機械のように・・・

自分の中を見つめていた

第十九小節 儂い思い出

時は満ちるもの

とめられない

空時・・

――風のとおり道――

遠のいていく意識

考えるのは、あいつの事だけ・・・。

遠く霞む意識の中、蘭の声が聞こえた気がした。

そういえば蘭に・・・確か中一の時だったけ？

何か質問みたいなこと言われたんだよな・・・

ねえ、新一。こんな話、知ってる？

人は自分のためにしか涙を流すことができないんだって。

例え愛する人を失ったとしても、もうその人に会えない自分が
可哀想で泣くんだってさ。

結局みんな、自分が幸せでいたいんだよね。

私は新一の事で泣くよ。

ただ、じゃなくてどうしても、だから。

それから

話題が変わったような・・・

そうだ

新一！！！！公園行こうよ。
公園。在ったじゃん寝転がって空が綺麗に見える場所。
行こ！

て、なったっけ

そんで行って・・・

めんどくさいけど寝転がって空を見て話したんだ・・・

何処から見ても同じじゃん

違うよほら・・・ここには桜の木が沢山あって
それで綺麗なの・・・

何だ、そんなことか

何だって、何よ！！

あ、悪い悪い

っもうホントにああなんだから

澄んだ瞳で見つめた青空

太陽の匂い

陽だまりの中で転げまわった楽しさ

蘭の言うとおり本当に綺麗だ
泣きたくなった

懐かしい・・・もう終わりなんだ

何もかも

でも、愛してほしいなんて言わないから。

ただ、隣にいて欲しかった。

時折気紛れに、ちゃぽけな見返りと優しさを見せってくれるだけでよかった。

どんなに嫌われたって。

それが蘭の望んでいることだって。

俺は・・・・・・・・・・

あいしてる、あいしてるよ。

永遠にずっとずっと、あいしてるよ。

自分で決めたことなのに

生き延びる事が幸せであるならば、そんな幸せ要らないから。

二人で過ごす未来が欲しかった。

途切れてしまった「未来」を知ってから「今」を愛でも、もう遅いのだ。

もっと近くに居たい。もっと幸せになりたい。

蘭・
・
・
・

第二十小節 情け

俺に夢はあったはず

あった・・はず

――風のとおり道――

「おい!!」と声をかけても聞こえてない

大丈夫か? こいつ?

何度言ってもきりがない・・・

ハアあ・・・あ

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

泣いている・・・！？

・・・何かを思い出してか？
・・・

泣くなんて男らしくねえな

ま、俺が言っちゃなんだが

でも・・・

綺麗な涙だった

透明を通り過ぎた程の透き通った色

一粒一粒宝石みたいな大きな粒

自分には絶対に出せない

この世で一番汚れている自分には・・・

どのくらい俺は人を傷つけただろう

幾度人を泣かせただろう

顔が似てても

心は違う

例えるなら天使と悪魔

許される事なら深く謝りたい

けして、楽になりたいなんて願わないから

闇を綺麗さっぱり消すなんていわないから・・・

そして決めた

願った

この者へここのへ

今を楽しく生きて・・・

笑顔で笑って

未来を諦めないで

幸せでいて

瞬いて 人を信じて

自信にあふれて

どうか・・・どうか・・・

ありのままに輝いて

綺麗な人というのは男じゃ変て思ったけど

本当にいるんだな

そのままの君でいて

誰かを幸せにできることは君にとって

すばらしいことなんだ

工藤新一・・・まさしく an angel のような a
brave man だ

第二十小節 情け（後書き）

えっと・・・はい いきました二十話以上！！
皆さんの評価と感想文のおかげです（笑）

これからがんばっていきます

今度の目標は三十話ぐらいです

今までの小説とちがう

長編にしたいと思います

ここでききたいことがあります。

私は題名で風のとおり道と載せていますが
風のとおり道の横に

「〽終焉さよならまでの奇跡〽」

を入れたらどうかと思いますが。

皆さんはどちらがいいと思いますか？

あと、快斗はどうしたらいいと思い・・・

ちがいます。ごめんなさい。

これをいっただけだ

では、だめだし感想&感想、一言感想&一言感想、評価&評価、回答（さっきの質問）おねがいします。

第二十一小節 覚えていない記憶

アレ、ココハドコダロウ……

——キミハダレ？——

——風のとおり道——

『ま……うね。』

『ん。……か……た』

『ぜ……に、……そく……か……』

『の……ま……の……さ……らが……
……さ……なか……で。』

『やく……だよ。』

「
・
く
・
・
・
」

「ゆび・げん・・つ・・はり・・ぼ・
・
ま・・・す!」
」

「
・
・
・
・
つ
・
・
う
・
・
ひえ
・
」

『泣かないで、

笑ってよ

俺がいなくなっても希望はあるからから

瞬いて 自信にあふれて

幸せでいてね』

『うん・・・うん』

「
さ
よ
う
な
ら
」

たった一人で痛みを乗り越えるために、限らない想いをあげる

たった一人で生き抜くために、この空よりも果てしない希望をあげる

ーーーーフワリかすめ

消えていく

君は空気のごとく限りなく透明に、微笑んだ

淡く淡く、静かに強く

まるで孤独な星アルファルドのような

悲しい瞳をしながら――――

次の次は無いつてわかっているのに
やり遂げられない

それがどうももどかしくて

自分に悔しい

君は居ない

何処にもいない

たった一人

ヒトリ

ぼんやり——人型の影が見える

誰かがこっちへ来る

眼を拭いて

座って下を向いたまま時は進み

トンっ

隣に女の子が座った

「貴方の名前は・・・？」

「俺、の前に君は・・・」

「私？私はランよ」

ランか

早く貴方の名前を教えて・・・

俺は・・・シンイチ

お父さんは？

いない

・・・じゃあお母さんは

いない

他の人は？

死んじゃった・・・

ごめんね

いいよ。もともと俺に親はいない

えっ・・・

親・・・知らない

| 私にもいない。 |

| そうなんだ・・・ |

| だから一緒 |

| そうだね。一緒 |

これから二人

ひとりじゃない

フタリ なんだ

第二十一小節 覚えていない記憶（後書き）

ごめんなさい・・・

またもや

わけの解らない文を――――

でも、意味分かるようにこれからの文をがんばっていきます!!

第二十二小節 最後の挨拶

また、何で……

……

まもれない

――風のとおり道――

は、と眼がパチクリ。

快斗はようやく眼を覚ました・・というより覚めた

「あっ・・おい工藤!! 眼さませ!!!!」

新一もパチクリ

「え・・あっ・・黒羽? どうした?」

「どうしたって・・さっきから回想モードに入りやがって」

「ごめん。ごめん」

「じゃあ、さよなら」

あっさりしてんな俺。

「ちょっと待って」

言いたい事があるんだ……

「ん。何？」

ほかに言う事あったっけ？

「や……約、束……」

「は？約束？」

もしかして あのことか

「何か、回想に入っている間そんな事があって……」

はつきりはおぼえてないけど……

「それなら……俺も見た」

うなづく快斗

「ほんとか!」

「ああ」

「自分に似た奴が会話してたよな」

約束がなんとかって

言葉が途切れ途切れで聞こえたから

ちゃんとしたことは解らない。

「その何日か後俺見たいな奴が弱って工藤に似た奴が泣き出して・・・」

俺に似た奴が慰めてて

「小6ぐらいの大きさだったし」

いや、まてよ。小4かも

「ま、どっちにしても
何の記憶か覚えてないけど」

「だよな・・・」

不思議な感じ・・・はるか昔に戻ったみたいだ

は？昔に戻った？どう言うことだ？
自分で思ったのに
変なの

「それだけ？」

もっと重要なことかと・・・失礼だな

「後・・・女の子・・・が」

「えっ女の子？俺、弱った部分ぐらいしかみてないぞ」

「そう・・・か」

俺だけなんだ

ヒトリに変な気持ちができる

女の子はランだっけ。

もしかして・・・

「言い難いんだけど・・・約束しないか？」

「何を・・・?????!」

「今 桜が咲いているよな」

「うん」

・
・
・

「又、いつか。この桜の咲くあの丘で会おう」

「・・・解った」

「約束だぜ！」

「解ってる」

「会えないと解っていても・・・約束・して、いいよな」

「「じゃあな」」

「黒ば・・・っ快斗!!!!」

「!いきなり呼び捨てでなんなんだよ」

「いや・・・何でかさ、これが終わりのような気がして・・・」

ヒントみたいだ

「はあ?! そんなわけないだろ!!」

少し笑っている君。

変な顔するんだね

君は解ってる?

次に……皆……笑っていられるか……

「だよな」

いかないで、と声が出ない

まるで音の無い世界のように聞こえなかった

「それじゃ……これが最後」

最後って言わないで。

又、また……行ってしまう

・
「さようなら・・・新一」

早く、早く

「・・・っ・・・さようなら快斗」

どうして？

どうして言いたい事が言えないまま
終わってしまう――

笑顔で別れたって悪いことが起きないわけじゃないことを
知ってたのに知らん振りした

だから・・・だから・・・

第二十二小節 最後の挨拶（後書き）

はいいいいいいいい！！

やっと終わりました迷寂曲

終わっただんですよVV

次の曲は・・・お楽しみに

感想&mp;評価お願いします。

第二十三小節 再び

こんな風になってしまったの？

――風のとおり道――

俺は快斗と別れてから

真っ先にあの丘へ向かった

愛しい人に伝えるために・・・

ハアハア

やっと丘にたどり着いた新一は再び涙を零した

あの・・・景色だ

急いで涙を拭いて

新一は電話をかけた

ドクッ　ドクッ

胸の鼓動が激しくなる

「あ、もしもし・・・蘭・・・か？」

||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||

がシャ・・・

私は急いで携帯を服のポケットに入れた

そして、新一の居るはず丘へ夢中で走って行った

「あ、もしもし・・・蘭・・・か？」

よかったら 桜が満開に咲いていても綺麗な

景色が見られる丘のところまで来てくれる？

伝えたいことがあるんだ・・・。

場所・・・わかるよな」

顔が熱い

胸の鼓動が激しく高まる

良いことだったら嬉しい。

でも、自分の中にもやや

あるの。

前に近づかないでって言っちゃったから・・・

気まずいかもしれない。

それでも・・・足が動いた

桜が満開・・・、綺麗な景色の丘・・・

解らない

私、その場所がわからない

びたり。

蘭は足を止めた。

どうしよう。

急に目尻が熱くなってきた

そんな時、私の頭の中に不思議な映像が蘇った

綺麗な景色・・・満開の桜・・・子供の頃の私？

覚えが無い・・・隣に
いるのが・・・
新一？

パッ

消えた・・・

また、蘭が走り出した。

第二十三小節 再び（後書き）

短いですね。

第二十四小節 繋がる絆

キミハどうして、

俺より早くいってしまふの・・・？

ーーーー風のとおり道ーーーー

フウ・・・

ようやく蘭は丘へと着いた

アイタイ人に会うために

私は辺りを見回した。

けれど新一の姿は見えなかった・・・・・・。

まさか・・・？帰ってしまったの？

そんな・・・

と思う蘭の前にぼんやりとした人影が映った

「新一！！！」

すると……手を振ってこっちへおいでと合図した
のに新一は蘭とは反対側に向かっていった。

「待って新一……！」

ザザッ
アー
ザッ

幾つもの花びらが新一を隠した。

そこには、愛しいイトシイ貴方が居た。

「座って……」

元気が無いような声

「どうしたの？……」

心配そうに声をかける蘭は驚いた

ギュ
ツ
・
・
・
—
—
—

抱きついたのだ

涙を流して

「・・・会いたかった・・・」

「ずっとずっと」

ずっと前から待ってた

君が来てくれるのを・・・」

第二十四小節 繋がる絆 (後書き)

はい、前半の前半ですね。
まだつづきますよ。

第二十五小節 疑惑の解消

ありがとう。

ありがとう。

「――風のとおり道――」

「ここで待ってた」

「し、新一何を言ってるの？」

「よかった」

何・・・？

新一じゃない・・・

「―― アナタハハダレナノ――」

「ちょっと、どうしたのよ新一ってば!!」

「それが解らないんだ……」

「もう、変なの!!」

「悪かったな」

「それで?! 本題は!」

「ああその事……」

「じれったいよ」

「伝えたいんだ」

君を愛していること

君と生きたいこと

「蘭……愛してる。」

「えっ・・・」

顔が真っ赤になって、驚く蘭

「俺は蘭を愛してる。
でも前振ったのは俺、だけど・・・それでも好きなんだ」

「新・・・」

「振られるって解ってる」

「ふらないよ」

「・・・え・・・それって」

「私も新一の事が好きなの」

ずっと前から

「蘭、・・・ありがとう・・・でも・・・」

「解ってるよ新一のこと」

「どうして……」

「青子ちゃんに聞いたの」

《ねえ。蘭ちゃん。私、しんいちくんのが好きなの。でも、しんいちくんは蘭ちゃんのが好き。》

新一くんの哀れな姿、あと一年……だから、だから、新一くんの恋を応援するのが優しい彼に幸せが来るように》

「・・・そうか」

「うん」

「解ってるんだな。」

「ところで新一。」

「あん？何」

「この丘どうして知ってるの？」

「そのことか・・・」

第二十五小節 疑惑の解消（後書き）

はい、短いので次回まで続きます。

第二十六小節 幻の丘

ごめんな。

ホントにごめんな。

ーーーー風のとおり道ーーーー

「快斗が去った場所」

「えっ……」

快斗君が死んだ場所？

何で……今、生きてるんじゃないの？

「昔の儚い丘」

「新一……。ちゃんと説明してよ！」

「……だから……」

俺が一人になった場所だって

「何のことよ……」

「そっか、蘭は忘れたんだ……」

此処は全てが終わって又始まった夢物語の舞台

「忘れた……？」

「幾年、幾万年の前の事だ。」

俺と快斗はある約束をしたんだよ……」

『また……会おうね。』

『うん。・わかつ・た』

『ぜったい・に、やくそくだから・・』

『この・・・まんかいの・・さくらが・・
・・さく・・なか・・で。』

『やくそく・・だよ。』

『・やく・・そく』

『『ゆびきりげんまんうそついたらはりせんぼん・
・のーま・・・す!・!』』

「うて。」

「・・・・・そして?」

第二十六小節 幻の丘（後書き）

次回まで！！

第二十七小節 置いていかれた

もう、ヒトリじゃないんだよ……

——風のとおり道——

「……それで

快斗は……、俺を置いてった。」

「つまり、居なくなったのね……」

そうだ、とこっくりうなずいた新一はそっと立ち上がった

「なんでかはっきりしないけど、快斗は此処で死んじゃった」

「そうなんだ……」

まるで自分の事のように悲しい顔をした。

「そこでな、蘭が来てくれたんだ」

「えっ——！！」

覚えが無いだろうな

・・・もう、辺りは暁色の夕焼け

『きみはだれって』聞いてくれたんだ

俺を見て、おれ自身に

それだけでもうれしかった。

『新一』と後になって答えたのさ

それから蘭と俺は一緒に此処に来て遊んだんだ

「そのこと——だったの」

「何だ？」

「私ね・・・途中で場所がわからないのに気づいたの」

「そっかぁ・・・」

だから、そのことが過ぎったのかぁ、と思う蘭であった。

「だから」

「ん？何新一」

よく見ると唇がかすかに動いていた

このおかで

またやくそく

かいとと

したの

「そうなんだ」

守れると良いね

「うん」 うなずくのは簡単

守るのは

難しい

第二十七小節 置いていかれた（後書き）

久しぶりの更新でした。

第二十八小節 君との終わり

何もいえない。

もどかしい。

――風のとおり道――

「なあ、もしかしてさ」

はじめに俺が意識が無い中

蘭が変な俺にあっただよな

そいつ――その記憶の俺じゃないか？

「そうかな」

新一らしくなかったもんね

「たぶん、そうだろう」

ここで、俺^{じぶん}を見つけてくれた

ことにお礼をしたかったんだろうな

蘭が新一を見て、空を見上げる

「ありがとう。」

貴方が居てくれて よかった

だから 私がいた

貴方があってこそ

私は

『今』を生きているの

そして再び新一を見た

すると新一の口が開いた

「俺こそありがとう。」

君が見つけてくれたから

孤独が消えていったんだ

安心できるんだ

二人の眼から透明な水が流れ出た

お互いがお互いに見せる初の涙

心が通じた証

哀と愛が交わった奇跡

新一と蘭は相手を抱き寄せた

「愛してるよ。」

二人で重なる言葉に

重なる影

その時、新一の携帯が鳴った

二人は一つの影を二つに戻して

恐る恐る内容を見た

その内容は

“ 快斗が交通事故にあい死亡 ”

と青子からだった

第二十九小節 破られた約束 へ死んでいくような心へ（前書き）

破られた約束はだいたい五、六話に分かれます。
少しは一話ずつ長いですよ。

第二十九小節 破られた約束　　（死んでいくような心）

俺のこと、

嫌いなのか？

「――風のとおり道――」

新一は、携帯を握りしめたまま

呆然と立っていた

“ 快斗が死亡 ”

「.....」

これは夢だといってなんて

ありきたりな台詞なんか言わない

ただ

何も考えられなかった

快斗のことで頭がいっぱい

「新一……」

蘭に声を掛けられても気づかない

「ちょっと私、
——行くね」

それだけ言うと蘭は走ってどこかへ行った

それを後ろから見ているだけの俺。

普通、追いかけて泣いたりすんだよな

なのに……俺は泣きもしない。

喚きもしない。

誰かに言われたことがある

《何なのよ、この子供!!》

怖いわ、まるで・・・

感情が欠落してるみたい!!!!》

別に何も感じ無かったし・・・

やっぱり俺って変わってんのかな

でも心が重い

死んでいくようだ

嘆きたい

解ったことは 心が泣いていた。

桜は何も無かったかのように散り、

空は事を消すような青

そうか、

見限ってたんだね

この世界を

俺は病院へと

だけでも、その後すぐに

俺を

走り出した

もう出なくなるぐらい

涙を零しながら・・・

着いた部屋のドアにある名前は 黒羽快斗

考えたくない

幸せが消えていく

やり遂げられなかったモヤモヤ

又、破られた

もう

信じない

ダレモ

シンジラレナイ

死んでいく心を

抑えながら

無の世界への扉を開いた

第二十九小節 破られた約束 　　く死んでいくような心く　　(後書き)

ごめんなさい・・・。

長くありませんでした・・・。

第三十小節 破られた約束　　（悲劇の再会）

君に――

幸せあれ

――風のとおり道――

過ぎた時は　戻らない

常識だ

なのに俺は　時が戻れば

なんて思った・・・・・・・・

だって、快斗が目の前で横たわっているんだから・・・

青子が後ろを振り向いた

「あ・・・・・・・・新・・・一・・・君」

快斗が・・・快斗が・・・

「アオコチャン・・・」

解ってるよ

「新一君・・・??」

いつもと違う・・・

「ナニ？」

青子ちゃんも信じない

何かを察知したかのように

青子は新一に話した

「快斗ね、どこかの丘にむかっただみたい。

それで私に＜絶対についてくるなよ＞

って言うってから向こうに渡ろうとしたら

私に向かってトラックが突っ込んできたの

快斗は私をかばって・・・トラックに跳ねられたわ」

私の所為よね……。――。

「快斗――……。」

俺は快斗の顔に掛けてある白い布を取った

予想どおり、青白い顔をしていて細くて元気がなかった

俺の心はもう――……。死んだ

カイトハ　タヨリダッタノニ

モウ、イナイ

フタリデモナイ

イツカハ　ヒトリニナルツテ

ワカッテタ

ワカッテイタ

ハズナノニ・・・

アオコチャン キライ

カイトモ キライ

ランハ・・・

ガシヤンツ

ドアを勢いよくあけた青子は外へ走り出した

後ろ姿はまるで孤独な猫

涙を流して

新一の前から去った

「待つて・・・」

ひとりにしないで・・・！！

オイテイカレタ

ヤブラレタ

もう俺は心を閉ざした

俺の世界が消えた

ゼンシンデ
狂いたい

「ウワアアアアアアアアアッ・・・」

頭を抱えてなき叫ぶ俺に

何かが降りてきた

天使・・・？

な、わけが無い

メヲトジタ

ホカノセカイニハイッテシマワナイヨウニ

『新一』

今、この声を聞きたくない

思い出したくない

苦くて辛いおもいは

イヤダ

ダカラ、

ランモ キライ

病院のベツトに座った

俺のまわりにはダレモイナイ

イヤ・・・

カイトガ イル

第三十小節 破られた約束　　く悲劇の再会く　　(後書き)

わかりましたか？。

第三十一小節 破られた約束　く快斗の謝罪く（前書き）

快斗の視点です！！今までわからなかった快斗の気持ち公開！！！！

第三十一小節 破られた約束 〔快斗の謝罪〕

サイテイだね・・・

君の言うとおり

――風のとおり道――

目の前には君がいた

言葉をかけようとしても何をいえばいいか解らない

君になんと言えば良い？

どういえば傷つかない？

君を沢山傷つけた俺にはわからない

又、また・・・新一との約束を破ってしまった

生きていればよかったね

死ななければよかったね

でも、俺は青子を助けたかったんだ

新一が青子を憎んでも

青子が悲しくなる気持ちが増えても・・・

そう俺はダレよりも汚れた人間

自分がよければほかはい

自己中な生き物

自分で思うのが悲しいけど

それが揺るぎない真実

「愛する人がいれば生きる意味がある」って前言ったよな・・・

もう俺は生きてないだから愛する人がいても生きる意味無し

光も無い

希望など一つも無い

願いは・・・ある

新一が笑ってくれること

自分が辛いときでも笑顔を絶やさずに生きること

そんな思う俺は・・・おれは・・・人間を劣っている

だって、自分は約束ごと破って人には願いなんかをカケル

時間は経ち、新一と目が合った

自分に気合を入れた

でも不思議に思ったところがある

目が病んでいる

光が消えている

・・・

まるであの時みたいに・・・

あの時のことを思い出す度

おれ自身で自分の首を絞めている

気がした

それでも戦って――責任を償って――

君を君に戻す

心が泣く・・・・・・大好きな君に嫌われる恐れ

さあ、心と君との戦いの始まりだ

第三十一小節 破られた約束　く快斗の謝罪く（後書き）

あい．．．すみません。

第三十二小節 破られた約束 〔拒絶〕（前書き）

自分では風のとおり道の中で、長いほうに入ったとおもうんですが・
・

第三十二小節　破られた約束　（拒絶）

君に

託したい

――風のとおり道――

「ねえ新一」

これが始まりの挨拶

時間が飛ぶような空気

幽霊だから浮かぶ身体

「・・・・・・・・」

「なんか言っててば」

やっぱり嫌われたね

新一の気持ちわかるよ

こんな奴と話したりしたくないよな

でも、俺の役目は果たさなければ

「ねえ・・・」

「うるさいっっ！……！！……！！」

返事が返ってきたと思えば大きな叫び声

「新しい・・・うるさいっつてるんだよ！……！！……！！」

わかってる

わかってるよそんな事

ほんの少ししか時は経っていないのに

心はもうボロボロだ

「聞いて」

「うるさい」

「解ったから」

出なくなりそうな声を

必死で出して

君に伝える

「希望を捨てないで

笑顔でいてよ」

「……………!!」

その俺の言葉に反応したのか、その言葉の意味に反応したのか

わからなかった

「人との間に壁をつけないで・・・」

「なんでだよ・・・」

「だって」

言っただじゃん

君は、俺に

あの時に

俺は又、痛みを感じた。

「悪いのは俺、だから・・・だから」

俺を・・・悔いた気持ち、辛い気持ち

全部押し付けられたいから

そこで俺は気づいた。

新一の目に光が少し戻ってきていることを。

後一押し、決め手をつける

きみのために

おれのために

すべてのために

窓から、暖かい日差しが差し込み、

俺の身体を包む。

それに何かを任せたように俺は

触れるはずの無い新一の頬を撫でた

驚いたことに触れられた。

最後のチャンスがやってくる

嫌そうな目をするけれど

やめられない

胸が高鳴る

もうすぐ終わり

辛い戦いの終わり

最後まで息を抜かずにねばるだけ

「ごめん、俺は勝手にサイテイな男なんだ。」

誰かが倒れたかのような顔で新一は快斗を見上げた

「そんなに驚かなくて良いよ」

「か……い……と」

「蘭ちゃんや、青子は関係ないんだ……」

すべて俺の責任——だから……ね？

わかってくれた??.?」

関係ないなんてさっきまで全然考えてなかった……

ほら、サイテイでしょ……。

さっきまで黙っていた新一が語り始めた

「そ・・・——それだけじゃないんだ・・・・・。」

俺は、蘭達に・・・いや、他人には

いい所しか見せてない。

離れられるのを恐れて・・・

だから、おれ自己おれを作った

こんなうるさくなく、めざわりでもなく、

あきらめやすいなんて事の無い、

完璧を偽っていたんだ

そ・・・

自分のことしか守れないんだ

自分を恐れられるのが嫌。

これが

俺の弱さ

悪いところ・・・

蘭が嫌いなのは・・・きらいなのは――

辛い思いをするのが嫌だから

な、自己中だろ？」

「自己中じゃない新一は・・・。

自己中なのは俺だ。

なあ・・・あの子という時は悲しかった？

辛かった？嫌だった？」

ブンブンッ

頭を一生懸命に君はふった

「でしょ・・・つらくはないんだ

ただ、自分が悲しいだけだろ

それで、相手を悪く言うだけだろ」

「そうだね・・・そのとうりだね」

今までの自分が変だったんだね。

今、やっと、気づいたよ

「悪かった。嘘だつてついたごめん」

でも、

全てを語ってくれたねありがとう。

俺のためにありがとう・・・。

「じゃあ、そのことをちゃんと相手に伝えてごらん。

たぶん・・・いや絶対に恐れなんてしない。

嫌わない

だから笑顔でいれば大丈夫

あの子が居れば大丈夫

安心していいんだよ・・・

「うん・・・うん」

快斗、ありがとう」

「こちらこそ、ありがとう新一」

「さようなら・・・向こうで会おう」

「向こうって・・・？・・・快っ・・・斗待って！！！」

腕を伸ばしてみたけれど

君には触れられない

変わりに一粒の水滴がついた

涙・・・幽霊でもでるんだね。

おもしろい

触れられないのは　俺が駄目だから？

だって君には俺が触れられたんだよ

やっぱり・・・

俺って・・・

『大丈夫、君は君らしくすること

そうしたら必ず幸せはくるから・・・』

微かにそんな声が聞こえたような気がした

第三十二小節

破られた約束　（拒絶）（後書き）

どうでしたか？

わかりましたか？

次は快斗の気持ちと不変の対面になりますかね？

第三十三小節 破られた約束　く知らされた思いく（前書き）

ここも長いですよ

第三十三小節 破られた約束　く知らされた思いく

どうしろと

いうの・・・

――風のとおり道――

辺りは漆黒に染まり

光るものといえば電灯

それを頼りに新一は乾ききった手を握り締めて

青子を探した

おもったよりも早くに青子は見つかり、ベンチに座っていて

上から電灯の光が降り注ぎ

天から降りてきた精のように輝いていて、おとぎばなしのような光景

新一はそっとベンチに腰を下ろし青子に話しかけた。

「青子ちゃん……」

その声は振るえていて

場の雰囲気を現したようだ

「新一君」

帰ってきた返事ははっきりとした発音

「ごめん、青子ちゃんは悪くないんだよね……」

悪いのは俺だね」

「そんなことないよ、だからここへ来てくれたんでしょ」

さっきと違う明るい声

ニッコリ笑う青子に新一は自分のしたことを改めて感じた

「さっきな、快斗が現れたんだ。」

それで青子ちゃん達は悪くないって、自分が悪いって言ったよ。」

「快斗……らしいね」

一瞬哀しい顔をした青子だったが

再び笑顔に戻った

「ホントに……ごめん。どういえぱいいか解らない」

「気にしないで」

青子は新一の顔が少しだけ快斗を思わせたのに微笑を浮かべた

逆に新一は、青子の笑みに蘭を思わされた

「新一君」

「何？青子ちゃん」

私ね・・・

「新一君のことが好き」なの

えっ

「俺のことが好き・・・？」

うん

「でも、新一君は蘭ちゃんでしょ！」

「え・・・あつ」

「素直にいいんだよ。」

「うん——おれ、蘭が好き」

どうしよう

あれほど練習したのに・・・

泣かないって・・・

心が痛い

胸にその言葉が突き刺さる

「だよね」

私、絶対無理してる

こらえろ、自分

「だから・・・」

「えっ・・・」

・
・

「だから、・・・好きだから私は新一の恋を応援するの」

その時の彼女の笑顔は眩まいがするほど

輝いて綺麗で美しかった

たぶん・・・忘れられない・・・いや。

忘れない

・
・

「ありがとう。青子の気持ち、無駄にしない。

“永遠”に誓うよ・・・。」

「絶対だからね」

「わかってる」

愛されてるんだ俺は

あおこに、かいとに

らんに・・・

もう、偽りなんか消してやる

「がんばれ——新一——！」

その応援に押されて俺は行方のわからないはずの蘭の元へ向かった・
・
・

「ありがとう、青子!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

ありがとう。じゃーな」

そういった新一の顔は優しい顔だった

こういうとき、かいとなら・・

「がんばったな」

とか

「笑顔を忘れずに」

なんて

いうんだろうか？

解らない・・・。

快斗。

俺、一つだけ希望をもらったよ。

“永遠”という名の希望を、

愛という名の永遠を

第三十三小節 破られた約束 くらされた思ひ くら書き

どうでしょうか？？？？？？？？？？

第三十四小節 静寂の夜明け

涙

悲しい月光

透き通る空に滲む

――風のとおり道――

それを

君に授ける・・・。

「・・・蘭」

気付けば、新一に呼ばれていた。

新一の呼吸は乱れていて、探し回ったと一目でわかる。

あの時、

私は新一宛のメールを見て、思わず新一の傍を離れた。

私……最低――

普通、新一に付き添ったり励ましたりするじゃない。

最低だ……逃げるだなんて

自分のおろかさに吐き気がする。

そう思うと又、目尻が熱くなって来る

こんな時に、ないたら駄目

新一はもっと辛いのよ……

確かに私と快斗君はあまり面識もないし、話したりしない

だからといって……

「蘭……!!」

はっ

新一の叫び声で正気にもどった。

「大丈夫か？」

心配した優しい声で話す新一。

ごめんね、私、役に立てないや

辛いのにね、寂しいのにね

私は何もしてあげてない。

貴方の役に立たない……。

「具合悪いのか……！」

「そうじゃないよ………」

「……！」

いきなり返事を返した私に驚く新一

「自分に酔っただけ……………」

「なら…………いいけど……………」

まだ不安そうな顔する新一

「大丈夫だってば！」

そう言う私の頭の中に何かが浮かび上がった。

…………新一と初めてKISSをしたときの事……………

そうだったね。

好きで好きでたまらなくて新一と一生を誓ったとき、

ドキドキしたんだっ…………。

だってでも……もう、無理だよ私には無理だよ

『君が居れば大丈夫。新一きっと笑顔だから』

声が聞こえた……。

そう、目の前の新一の隣で頬笑む快斗君が浮かんでいた

『お願い……新一を救えるのは君だけだから』

そんなことを言われても……

『お願い』

どうしようか迷った私は心に決めた

解った。

新一と歩むよ。

微かに微笑む快斗君は何故かとても悲しそうにどこか寂しそうな顔だった。

多分、この時から何かが始まった。進み始めた。

そのことは・・・私、後で知ることになる。

「ねえ新一・・・」

「なんだ？」

「悲しいんでしょ・・・寂しいんでしょ・・・
泣いていいよ」

「！何言ってるんだよ・・・寂しくないんか・・・悲しくなんか・・・」

するといきなり新一が私に抱きついて

まるで自分の一部を奪われたようなそんな痛みを抱えた様子で泣いてた

その時、私は思った

これから新一が悲しまないように、
堕ちないように私は新一の全
てとなる。

新一に光を、自分の命を授ける。

第三十四小節 静寂の夜明け（後書き）

えっと、この小説には一日一日がほとんど無いのでここで紹介します。

今は夏の初めになっております。

第三十五小節 新たな一歩（前書き）

はい、久しぶりに更新しました！！

皆様大変長らくお待たせしてすみません（汗）

第三十五小節 新たな一歩

残りは・・・後――

――風のとおり道――

太陽がとてつもなく熱くて、

少しの風でも、涼しいくらいのこの丘には私と新一の二人。

あの日から私達は改めて付き合うことにした。

今は八月中旬ぐらいで、体が溶けそう・・・。。

「らぁん・・・どっか涼しい所行こう・・・ぜえ」

新一は熱いのが苦手らしく、とつてもだるそうにしていた。

そう、新一の意見でここに来たんじゃ無い

私が勝手に新一を連れ出してきたの。

「解った、解った。じゃあ図書館にでも行こう」

よっしゃあ!! とガッツポーズして、私の手を取り、

早く! 早く! とせかす新一が子供っぽくてつい笑ってしまった。

「何だよ?」

「何でもありません」

「じゃあ早く行こうぜ!! 急いでよ」

「わかつ——ってちよつ——しんいち」

夢中になって走る新一に私は追いつけなかった
それに気がついた新一は足を止めて私に向かって
叫んできた

「はやく~~~~~しろ!!」

「なんですって……これでも本気よ!!!!!!」

怒った私を見た新一はあわてて逃げるように走っていった。

その後を追った。

走りながら

「昔とちつとも変わらないね・・・」

そう呟いた前には図書館の入り口があった。

第三十五小節 新たな一歩（後書き）

はい、短かったですね。なのでもう一話更新します。

第三十六小節 気付きたくない変化

もう、前には戻れない

――風のとおり道――

ガ
ガッ

図書館の自動ドアが開く。

中は涼みに来た人や、本を借りる人たちでいっぱいだ。

「ああ――涼しいいいいい!!」

さっきまでだるそうにしていた新一の顔が一気にさわやかになった。

「新一、せっかく来たんだから本でも借りようよ」

「ええ――俺、いいから蘭借りてくれば――」

「そうしようかな。ホントに新一いいのね・・・」

「ああ」

「じゃあどこか座ってて」

「ラジャー」

変な返事を返した新一は一番涼める場所を探しに行ったみたい。

っと本を探そうーーーーー

本を選んでいた私はほかのことを考え始めた。

そっか、もう枯れちゃったのか・・・桜。

又、桜を見たいな・・・

でも、その時には、もう――。

胸に刺が刺さった痛みを感じた。

そんな中、

手を動かしていたら、私の前の棚に一冊の本が挟まっている

題名は

“過去にもどるswail”

意味が解らなかったから、手にとってあらすじを読んだ。

主人公「swail」が突然過去に戻って人生をやり直すみたい。

何故か自然とその本が借りたくなった。

気付けば午後七時

私は急いで新一を探した。

「新一！もう七時よ！」

「えっ・・・もうそんな時間？」

「そんな時間なの」

「じゃあ送ろっか」

「べっ・・・別にいいよ」

「いいから、いいから」

そんな会話をしながら私達は図書館をでた。

「ふうー。少しでも涼しくなってよかったなあ」

「当たり前よ。だって夜だもの」

「おじさん、心配してるかもな」

「そんなことないよ、だって何か用事があるから今日は帰らねえっていったもん」

「ふうん」

それから新一は大きなあくびをした。

「・・・新一。まさか寝た?????」

と聞くと

「うん」

予想どおりの返事が・・・。

「いつから? いつまで?」

「蘭と別れてから、蘭が来るまで・・・」

「ええ!!!!!! そんなに!!!!!!」

「べっ・・・別にいいだろ」

不思議に照れる新一が可愛く見えた

「いいけどさあ・・・今夜眠れないかもよ」

「いいよ。寝れなくて」

「知らないからね」

「ところでさ、蘭。本借りたの？」

「・・・借りたよ」

「何？」

「教えてやゝんない」

「何だよケチ」

「ケチで結構」

はははっと笑ってる間に

もう、家の前。

「じゃあな蘭」

「ねっ・・・新一」

「ん？何？」

「聞いてくれる？私のあの丘に来た理由」

「ああ。そういえば何でだろうって思ったっけ」

「実はね・・・桜の木を見に行ったの・・・何か・・・ね」

新一は、そう言った私の頭をポンポンッと叩いて帰ってしまった。

怒らせたかな・・・？

そんな深く考えなかった私は

後で後悔することは知るよしもなかったのだった――。

第三十六小節 気付きたくない変化（後書き）

え——だいぶ話が進みました。

中間くらいですかね。

前の話とこの話と次の話は今後の話にかかわります。

第三十七小節 眠れない夜

光が闇に・・・・・・・・

包まれていく

――風のとおり道――

ドサツ・

帰ってきて、すぐさまに俺はベットに倒れこんだ。

蘭が話してきた内容に、無性になきたくなった

あのままだと・・・・・・・・俺、確実に泣いてたな――。

今思うと、自分自身が情けない

男なのに・・・・・・・・。

これまで何回泣いてきただろうか？

時計をみると、午前一時。

ふっ……蘭の言ったとおりだな、眠れない……。

苦笑いした俺は

又考え始めた。

蘭も悲しいはずなのに、俺ばかりが泣いて悪いな……。

「ごめん……蘭……」

そう呟いた俺は何もせずに、ただ寝たいと重い体を動かし、

いつもの体制でねむろうとした――。

しかし・・・。

「・・・っ・・・ああ・・・つく・・・ああ・・・っ・・・あ・・・」

とてつもない痛みが体を襲った

何も出来なくて、ただ単にもがいていた。

それから何時間も過ぎたような気がする。

額は汗でびっしょり濡れていて、ほかの部分も濡れていた。

もう駄目だ・・・。

そんな俺の頭の中には、蘭の笑っている顔が見えた

「・・・っ・・・ごっめんっ・・・な・・・ら・・・ん」

そう言い掛けた瞬間、スツと痛みが引いてきた

まるで、呪文のように・・・。

しばらくして

落ち着いてきたころ、ふと俺の前に“無”と“死”

の悲惨な文字が浮かんできた

「ッーックソ・・・!!」

ーダンッッ

悔しさがあふれて思いっきり壁を殴った

かみ締めた唇からは結構な量の血がでている。

意識が遠のく中

自分が解ったのは、手が腫れているのと、

眼から大量の涙が出ていることだけ――。

ド
ス
ッ
—
—
—
—
—

そこに倒れていたのは、果てた自分。

第三十七小節 眠れない夜（後書き）

久しぶりの更新でした。

第三十八小節 始まりの唄

戻れないのに……

戻りたい……

――風のとおり道――

「はぁぁ……」

ベットの上で私は大きなため息をついた。

理由は簡単、

余計なことをよく喋るから……。

度々そうするから新一に嫌われるんだよね……。

そろそろやめないと、本気で嫌われちゃう。

これじゃ一緒に歩むどころじゃないね・・・

快斗君に頭があがらないよ

・・・そもそも、新一と快斗君って・・・。

まあいいや。明日にしよう・・・

あれ？明日？明日って確か・・・

！！あっそうだ！！！！

本の返却日だ！！！！！！！！！！

そういえば未だ本読んでないや。

どうしよう・・・よし！

徹夜で読もう！

で、現在深夜一時。

読む中で、私は一つの言葉と一つの詩に興味を示した。

それは、「始まりの唄」と、その詩でものすごくこの事に似ていた。

おまけに、この先のことを語っているみたい。

私はその詩を口ずさむ。

「お互い時には すれ違い

いつかは恋に 実を結ぶ

それでも愛に 終わりあり

けれども再び 巡り合う」

言い終わった後には、眠気が急激に襲ってきて、

そのまま寝てしまった。

ま、しかたないか……。徹夜だから……。と、

誰もが思ってくれるでしょう。

第三十八小節 始まりの唄（後書き）

短くてすみません。

第三十九小節 焦りと不安 　　く悲しみを秘めた雫く（前書き）

なかなか更新できなくて、誠にもうしわけありません。！！

では、どうぞく。

第三十九小節 焦りと不安 〈悲しみを秘めた雫〉

ごめん、ごめん。

そういつた時はまだ解らなかった……

――風のとおり道――

「スウ――――パイイ」

そうやって、私はただ何も考えずにぐっすり眠っていた。

どうせなら、このまま眠っていたい……。

そう。悲しいことも無いから。だから――

永遠に、眠っていたい。

『蘭・ちゃん・!!』

ん?・・・この声・・・。

『蘭ちゃん!!!!!!』

ああ・・・快斗君だ。快斗君の声だ。

あえ・・・?

「成仏したんじゃないの・・・?!!」

思ったことを口に出してしまったのは何回目だろう・・・。

『そんなのんきに考えてないで!!!!!!!!!!!!!!』

うつ・・・ごめん。

「それで・・・何のようなの?」

それでもまだのんきな私の問いかけに快斗君は顔面真っ青になつて答えた。

『新一がつ．．．新一がつ．．．』

えっ．．．。新一？

その時の私の頭の中は嫌な予感が漂っていた。

「っどうしたの？ 新一が．．．」

『あっ．．．倒れ——つて蘭ちゃん!!』

快斗君が言い終わる前に私はパジャマのまま家を飛び出した。

そう。予感は当たった。

外はものすごい大雨で、辺りがわからなくなるぐらいすさまじかった。

はあはあ・・・と

息を切らして辺りをきょろきょろ見渡すと、一本の電灯があった。

それが私にはとても嬉しくて、小さな幸せを感じていた。

ま、今はそんな事、関係ないだろうけど・・・。

そして、又新一の家へ向かった。

「・・・さ、・・・寒いっ・・・」

ブルブル震える私は、

新一の家の前まで来たけれど、不安で門を開けられなかった。

でも、雨にずっと打たれていたので体の体温が低くなるのと、

鍵が無いので更に門を開けるのが困難だった。

そう考えている内に、ある考えが浮かんだ。

門をよじ登ればいい・・・と、

それでも体温低下は免れない。

でも、そうするしかないから、私は無理に登ろうとした。

だけど、登れるはずも無く・・・。

バツシャアーーン

無残に私は雨の中意識を失くした。

第四十小節 嘘だらけの幸せ 〔否定〕（前書き）

この、嘘だらけの幸せは何話が続きます。
どうぞよろしくお願いします。

第四十小節 嘘だらけの幸せ 〔否定〕

ん?・・・この声。

確か・・・。

――風のとおり道――

『・・・蘭・・・気付いたか?』

暖かい新一の声が降りかかってくる。

これは・・・・・・夢?!!?

「夢じゃねえぞ」

今度ははっきり聞こえた。

そっか・・・ってあれ・・・?

「私、夢っていったっけ?!!?!」

ああ・・・又だ、何回目なのよ・・・。
口に出すって・・・。

「いゝや、言って無いけど。それが？」

意地悪っぽく言う新一に腹が立ってきて、

「べ、別にいいじゃない！」

と荒々しく怒鳴ってしまった。

普通は、この調子で喧嘩になるのに、今日は違った。
おまけに

「何年おめえと幼馴染やってんだよ」と

呆れた口調で言い返された。

なんか、いつもと違う新一に不思議がる私の心

そんな時、新一が問いかけてきた。

「何でここに来た？」

次に私の口から答えとは違うことがでてきた。

「どうして私がリビングに？ 確か門の前で倒れたはず」

生意気に返しても新一は答えてくれた。

「ああ。それな、俺吃驚したんだぞ!!」

その言葉で私は納得した。

ここまでがんばって運んでくれたんだ。

ごめんね。新一。心の中で謝罪した。

その中でまだ、ぐるぐると疑問が渦巻いている。

「新一。倒れたんじゃないかったの？」

軽い弾みの私の声は新一に思いつきり届いた。

「・・・は。何言ってるの？」

「え？」

「倒れてないよ俺」

「嘘・・・」

「嘘じゃない。誰？そんなこと言ったの」

快斗君には悪い気もするけど、言おう。

「快斗・・・君」

「ふうん・・・あいつが・・・
それで、此処に来たのか」

その声は私が聞いたことも無い物凄く低かった。

私は鳥肌がたって、脚がすくんだ。

こんな新一見たこと無い——。

怖いから私は話題を変えた。

「・・・ね？今何時？」

「・・・・・・・・五時」

「もうそんな時間なんだ！！」

「・・・・・・・・ああ」

冷めた返事に動揺してしまう。

「ごめん。私帰る」

「・・・・・・・・そうか」

じゃあねと手を振って、

私は濡れたアスファルトを眺めながら帰った。

第四十小節 嘘だらけの幸せ 〔否定〕（後書き）

ええ……。気まずいですね。

でも、これには深いわけがあります。

第四十一小節 嘘だらけの幸せ **（憂鬱）**

それでも、私達……

恋人同士だよね……。

――風のとおり道――

新一の家を出てきてからどのくらいたったか解らない。

私はちよぼちよぼ歩きながら途方に暮れていた。

それから十分後。

「……っ!」

何かの視線を感じた私は、辺りを見渡した。

『・・・クスクスッ』

微かに笑い声がした。

目を凝らしてよくみると

男女数人が私を馬鹿にした顔でみている。

でも、今はそんな気になれなくて、

無視してすたすた歩いていたら、こんな声が聞こえた。

「なあ、あいつまじでだせえ。お前どう思う？」

「まじで、今更時代遅れえなんですけどお」

そのあと、服をみると、パジャマだった。

真っ赤になった顔は、りんごよりも赤かった。

あわてて自分家へ走って向かった。

あと五十メートルぐらいで家に着く。

そんな時、快斗君の姿が見えた。

快斗君は右折した。

あっちからいくとするとたぶん新一の家だ。

最初は追いかけてようとしたけど、

この考えにより、やめた。

だって、気まずいから……。

そう思いながら自分の家の玄関ドアを開けた。

なんか。なんだか……振り出しにもどった感じ。

これでも恋人といえるのかな？

その疑問だけが今の私を作ってた。

第四十一小節 嘘だらけの幸せ **（憂鬱）（後書き）**

更新しました！

短くてすみません。

第四十二小節 嘘だらけの幸せ 〔頼み〕（前書き）

このごろまともに更新していないので、今夜は二小節（話）更新します――！

第四十二小節 嘘だらけの幸せ　（頼み）

君の為なら

なんでもやってやる

――風のとおり道――

八月も、とうとう週末。

まだ暑いけど、中旬よりは断然マシ。

だけど俺は暑さに弱い。

まあ、そんな事はどうでもいいけど。

「やっちゃまったな・・・。」

心配して来てくれた蘭に、不安をさせる事をしてしまった。

だめだなあ。俺って・・・。

でも
――。

「新ッ!!!!!!」

ガチャンと扉を開ける音と共に

俺に似た声が部屋に響く。

その正体は快斗。

「あれ？蘭ちゃんは！？」

いきなり入って来るなり

辺りをきよろきよろする快斗。

蘭が此処に居ないことがわかると、一目散に駆け寄った。

「ね、蘭ちゃんはどうしたんだ！」

静かに重い声でささやく。

「……………帰ったよ。さっき」

すると、快斗の目が大きく見開いた。

それは俺は何で知っている。

「どうしてだ？普通なら、今いるじゃん。

まさか？新一が

「快斗！！！！」

快斗がいい終える前に新一が割り込んで叫んだ。

「新一・・・・・・・・」

「なあ。快斗」

そつと降りかけられた新一の声に、

快斗はこの先彼が言うだろう事を予感していた。

第四十二小節 嘘だらけの幸せ 〔頼み〕（後書き）

えゝ思ってみると。

私の小説ってかなりあれですね（汗）

快斗は幽霊なのに喋れるし、

新一も蘭も快斗が見えるし、

おまけに文が短いし。↑すべては自分の責任だろ！！ by 私の心

第四十三小節　嘘だらけの幸せ　（頼み・？）

君は

優しいね

――風のとおり道――

「頼みがある」

真剣な顔つきで彼は言った。

もちろん叶えてやるつもりだけど……

まあ、俺が出来る範囲までは。ね。

「何？その頼みごとって？」

普通の態度で聞く。

そうしないと、新一が落ち着かないから。

「これ以上蘭とかかわらないようにしたいんだ。
もちろん蘭も俺にかかわらないようにな」

予想外のことに俺は慌てる。

「なっ、なんでだよ！ 新一は彼女の事が好きなんだろう！」

この中に嘘は無い。俺の言った言葉には……。

無い。……はずだ。いや。無い。

「だってさ、これから先。傷つくのは蘭だろう！！」

俺はどうでもいいんだ。自分のこんな生命いのちなんか。
だけど・・・蘭は・・・、蘭は悲しいはずだろ?!
これ以上蘭が・・・
あいつが悲しまないようにしてえーんだよ」

「そっか・・・」

「お願い。快斗。お願いだ。頼むよっ・・・」

涙ぐむ彼に俺は微笑む。

けして馬鹿になんてしていない。

それとは違う感情が芽生える。

それは、“愛しさ”

友達として、親友として、好敵手ライバルとして。

「優しいな。新一は」

そう俺が言うと、新一は照れた。

「べ、別にそんなじゃねえよ」

「ははは。新一照れてるだろ?」

「照れてねーよ!!!!!!」

ったく、コイツは。と呆れ顔

『新一』と俺が言いかけたとき、タイミングよく

新一の携帯の着信音が鳴った。

ああ。たぶん。あの子だ。

なんか不吉な予感がする。気のせいかな?

第四十三小節 嘘だらけの幸せ くら頼み・?くら(後書き)

はい！短い小節・・・更新しました！！。

応援おねがいします！

第四十四小節 嘘だらけの幸せ（イベント）

笑顔って。

本当に必要？

――風のとおり道――

「はい。工藤です。」

『新一。私よ、蘭だよ』

えっ……蘭が俺に……？

「何か在ったの？」

脚が震える。

あの時と似ているから。

『実はさ、明日花火大会があるんだって。一緒に行かない？』

「えっ……」

どうしよう。これ以上……

“一緒にいるのは危険だ”

そうだ――。

「うん。行こう花火大会」

『ホント！じゃ、明日。午後六時にあの丘ね』

「わかった」

『バイバーイ』

「ああ」

蘭には悪いけど、花火大会これを利用しよう。

あれから着替えて私は借りた本を返しに

図書館へ行った。

そこで見つけたのが花火大会の張り紙。

それを利用して、よりを戻そうとした。

新一がえっ……って言ったときは

手が、体が震えて仕方が無かった。

でも、OKしてくれて良かった・・。

さっそく明日の用意をしなきゃ。

浴衣。着ていこう。

下駄は？ 巾着は？ 髪飾りは？

今の私は浮かれていた。

新一と笑い合う様子を想像して。

<それがいけなかったのかな・・・。>

そんな思いはまだ有りもしなかった。

第四十四小節 嘘だらけの幸せ ｾｲﾍﾞﾝﾄﾞ (後書き)

久しぶりの更新でした。

第四十五小節 嘘だらけの幸せ〜イベント〜

死にたいよ

ーーーー風のとおり道ーーーー

俺は、早速計画を練った。

もちろん。「別れる」計画だ。

蘭、たぶん傷つくよな。

でも、わかって欲しいんだ。

これが俺の愛し方だということを・・・・。

だって、俺が死ぬと悲しむのは蘭。

だから、予めに俺は傷つける。

酷いよな・・・。

なんでこんな残酷な選択しか

残されていないのだろう。

このまま、自然と死んで傷つけるか、

先に、別れを告げて傷つけるか。

普通は自然にを選ぶだろう。

だけでも俺は、自分の所為で死ぬ事になったんだから、

どっちも同じなんだ。

だから、だから俺は別れを告げる。

早くした方がいいもんな。

どうせ!! どうせ・・・傷つけたまま死ぬんだから。

ホントに――酷いよ。

なあ、もし神様がいたのなら、俺の願いを叶えてください。

「蘭が傷つきませんように。」

どうか・・・お願いします。

手と手を合わせて、祈ろうとしたら、

また、あの痛みが襲ってきた。

「っ――！！」

でも、それは早く引いて、

一瞬だったが、

俺は泣きたくなった。

もう。何も無いんだよ。

死にたい・・・

死にたいよ、今すぐに。

第四十六小節 嘘だらけの幸せ〜イベント?〜

どうして？

こんな事になってしまったのだろう……。。

――風のとおり道――

そしたら、また快斗の声がした。

『馬鹿！ 新一がそんなん弱気でどうすんだよ！！！』

それはいつものような優しい声では無く、

とても悲しくて、怒りの混じった声だった。

それに対して俺の声も荒ぶった

「何を言うんだよ！！ 人の気も知らないで！！」

あっ・・・・・・・・。

俺、快斗に・・・酷い事言った・・・。

思わず自分の口元に手をあてる。

どうしよう。

快斗は心配してくれて、俺の事を考えてくれるから、

そんな事言ってくれてるというのに・・・。

ごめん。快斗。本当に――

「ごめん。・・・・・・・・。」

すると快斗が頭を撫でてきた。

『いいよ。別に』

その声はいつもどおりの優しさに溢れた声だった。

俺はいつも思う。

快斗は一步上だ。

自分と同年で、顔も良く似ているのに。

兄さんみたいだ。

背は俺が・・・・・・・・？

えっ・・・・・・・・嘘だ・・・・・・・・。

俺は慌てて机に置いてある写真を見た。

何で？

そこには確かに同じ背丈の二人がいる。

だけど、快斗はもう死んだのに・・・

育つはずがないのに・・・

同じ背丈だ。

それよりも、今は快斗の方が高いようにも見える。

まさか、そんな・・・。

俺の成長が止まってる？

または縮んでる？

「っはははははは！！・・・っは」

急に笑いがこみ上げてくる。

それに快斗が驚いた。

『どうしたんだ?! 新一』

投げやりで快斗に話した。

「なあ、マジでウケるよ!・・・アハハッ!!」

俺のね、成長止まってるんだ!!

死んで育ってないやつと同じぐらいで

更に小さくもみえるんだ!!ハハハハハハハハハハ!!」

『新一・・・』

快斗は悲しそうな顔をする。

「ホンツとに面白いよ・・・なんで笑わないの?」

新一は尋ねた。

快斗は答えず、ただ思い悩んでいた。

新一は、涙を堪え作り笑顔をしている。

たぶん俺がそれに気付いていないと思ってる。

泣かない様に・・・笑顔だ。

悲しみが滲み出ないように・・・楽しそうに笑ってる。

第四十七小節 嘘だらけの幸せ（イベント？）

全て・・・

奪い去ってよ・・・・・・・・・・

ーーーー風のとおり道ーーーー

そんな彼を見ていることが辛すぎて、

俺は、新一を抱きしめて囁いた。

「今日だけでも楽しい思い出を作れよ・・・」

今、新一はどんな顔をしているんだ？

体制はそのまま。

彼はそれからずっと黙ったまま、
こくりと小さく頷いた。

「そうと決まれば!! さ、早く着替えて」

「・・・・・・・・・・・・・・・・えっ」

「えってなんだよ! 当たり前だぞ!」

「あっ・・・・・・・・うん。わかった」

そうして新一は俺の出した浴衣を持って
どこかへ行った。

「快斗・・・どうかな」

数分後、着替え終わった新一は俺に問いかけた。

「いいじゃん!!・・・あっ!!!!!!!!!!」
そろそろ約束の時間だぞ!!」

「ヤバッ・・・」

あたふたと慌てる新一に俺は紙を渡した。

「何？」

「これさ、蘭ちゃんと一緒に見てよ」

俺はそう言って新一を送り出した。

少し涙を零しながら・・・・・・・・。

新一はまだ気付いていない。

俺がもうすぐ消えることを・・・・・・・・。

自分の手をみると、微かにぼやけている。

新一に、最後に、会いたい。

さっき、送り出す時、言えばよかったじゃないか。

今頃になって後悔するなんて・・・。

まあ、「後で悔やむ」のが後悔だからな。

ごめんな。笑顔でお別れできなくて。

新一。さようなら。

また、いつか会おうな、

光さす、純白に包まれたあの場所で。

笑顔を絶やさずに。

視界が白く染まる

第四十七小節 嘘だらけの幸せ　（イベント？）（後書き）

えっと・・・とりあえずごめんなさい。

第四十八小節 嘘だらけの幸せ 〈イベント・?〉

さよなら、新一

――風のとおり道――

空が藍色に染まる中、都会の街中の

豪邸で、たった一人姿を消した。

「蘭!!」

「新一!」

家を出てから、俺は急いで蘭との

待ち合わせ場所に来た。

蘭は、淡いピンクの桜の模様のついた、

綺麗な浴衣を着ていて、とても可愛かった。

「待ったか?」

「ううん、ぜんぜん」

「そっか。よかった」

出遅れたから、走って来たけど、

待たせたつもり・・・・・・・・。

なのに、彼女は平気と言った。

その心遣いが嬉しい。

「じゃ、新一！行こう」

「ああ。楽しまねーとな」

そういつて、俺と蘭は一緒に
祭りの会場まで行った。

「わー！！人、沢山いるね」

「すっげーな」

周りは全部、人、人、人。

人の波に吞まれそうだ。

とにかく、人の少ない場所まで歩いた。

「ふう……。なんとか抜け出せたね」

ちょっと疲れ気味の蘭が

可哀想に思えた。

「蘭。何か買ってこようか？」

「私も一緒に行く！」

思いがけない言葉に、驚いた。

「平気か？」

「うん、大丈夫だから・
だって、まだ来たばかりだよ」

強がる彼女、でも、顔が疲れている

俺は、手を差し出した。

「ほら、掴まれよ」

照れながらも、自分ではよく言えたと思う。

「あ・・ありがとう」

蘭も照れくさそうにしている。

「何買うか？」

「うーんとわたあめ!!」

甘ったるいのキター!!

「新一・・わたあめ嫌い？」

「い、いや・嫌いじゃないけど・・・」

「やったあ！買いに行こう！！」

「うん・・」

とにかく、わたあめが売っている所へ向かった。

第四十八小節 嘘だらけの幸せ　　くイベント・?く　　(後書き)

わたあめ・・甘いですよね。。。

でも、好きです!!

第四十九小節 嘘だらけの幸せ　くイベント・？く

どうして・・

ねえ、教えてよ

ーーーー風のとおり道ーーーー

思った以上に込んでいる。

ここは駅か？通勤ラッシュか？

まあいい。

とにかく、わたあめを買おう。

「すみません。これ下さい」

「まいどありー」

俺が購入したのは、苺のわたあめだ。

よし、後は蘭の元へ帰るだけ。

急ぎ足で走った。

「ありがとう。新一」

さっそく蘭はわたあめを食べ始めた。

「んーおいしー♪」

とても嬉しそうな顔をした。

そして、「新一、いる？」

と聞いてきたので、

「いや、いい」と答えた。

ふと、あの時を思い出した。

快斗が紙を渡したときだ。

蘭と一緒に見てねって言われたけど……。

そういえば、なんだったたのだろう。

あと――。

快斗と別れてから数分したときに

なんか感じた。

あれは何故か、とても胸が痛かった。

まさかな……。

だけど、そうとも言い切れない。

疑いたくないけど――。

「新一？大丈夫？顔色わるいよ」

蘭が心配そうな目で見てきた。

「ごめん。ぜんぜん平気だから!!」

「そう？それなら良かった」

思い切って、あの紙の話題をふった。

第四十九小節 嘘だらけの幸せ
 (イイベント・?) (後書き)

えゝ長らく更新してなくて、誠に申し訳ありませんでしたっ！！！！！！！！！！
（汗）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2102n/>

風のとおり道 ～終焉（さよなら）までの軌跡～

2011年11月11日23時19分発行